

研究者（小園由美 古田美紀 大塚知子 宮川美佐緒）

1. 研究のテーマ・背景

地域包括ケア病棟における在宅復帰に関連する要因が退院に与える影響

2. 研究背景

地域包括ケア病棟は、急性期治療後の患者に対して在宅復帰を目標とした医療・看護・リハビリを提供することを目的としている。在宅復帰を円滑に進めるためには、患者の身体機能、認知機能、家族・生活背景など多面的な視点から支援を行う必要がある。

在宅復帰の可否には、ADL、認知機能、家族背景など様々な要因を考慮した上で早期支援介入が在宅復帰にどの程度関連するのかについては十分に明らかとはなっていない。

また、地域包括ケア病棟では医療的管理が必要な患者や在宅復帰が困難と考えられる患者も入棟しており、在宅復帰に関連する要因を明らかにすることは、今後の退院支援の質向上につながると考える。

そこで本研究は、地域包括ケア病棟における在宅復帰に関連する要因を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の目的

地域包括ケア病棟における在宅復帰に関連する要因を明らかにする。

4. 研究の方法

研究デザイン：前向き観察研究、診療録を用いたデータ収集を行う。

対象：令和 8 年 7 月～令和 9 年 1 月の期間に、地域包括ケア病棟へ入棟した患者

除外：入棟後 7 日以内の患者

レスパイト入院

※医学的理由による在宅復帰困難患者は除外せず、説明変数として扱う

調査項目

- ・年齢、性別、主疾患、ADL (Barthel Index)
- ・認知機能（認知症自立度 (I・II・III・IV・M の 5 段階)
- ・家族形態、退院後の医療処置の有無（酸素、吸引、点滴など）
- ・介護保険申請状況、入院期間
- ・退院支援の実施状況
(カンファレンス回数、初回カンファレンス実施までの日数)
- ・退院先（自宅、施設、転院）

5. 分析方法

- ① 在宅復帰の有無を目的変数とする。
- ② 各項目について単変量解析を行い、在宅復帰との関連を検討する。
- ③ 単変量解析で有意差を認めた項目及び臨床的重要と考えられる項目を説明変数としてロジスティック回帰分析を行い、在宅復帰に関連する独立因子を検討する。
- ④ 説明変数の選定にあたっては、先行研究および臨床的妥当性を踏まえ、多重共線性に留意する。
- ⑤ 有意水準は5%未満とし、統計解析にはEZRを用いる。

6. 研究の意義

本研究により、地域包括ケア病棟における在宅復帰に関連する要因を明らかにすることができる。

これにより、在宅復帰が見込まれる患者の特徴を把握し、より効果的な退院支援の実施につなげることができる。

また、在宅復帰が困難な要因を把握することで、早期から必要な支援介入を検討する基礎資料となる。

7. 参考文献

菱谷ら「地域包括ケア病棟における自宅退院率と退院支援担当職員の
実施状況との関連に関する研究」(四天王寺大学大学院研究論集 第18号)

8. 研究責任者

4病棟（地域包括ケア病棟） 師長 郷司 和美